

死(いのち)の時代を生きること

ホスピス・在宅ケア実践中の臨床医内藤いづみさんをお迎えして

第14回AKIHIKOの会開催

没後14年、今年も昨年に引き続き「AKIHIKO忌」を開かれた会へという観点から「第14回AKIHIKOの会」として、「死(いのち)の時代を生きること」をメインテーマに、三月二十一日(日)、東京神楽坂・日本出版クラブ会館で開催しました。

講師はお二人。一人は臨床医としてホスピス・在宅ケア実践中の内藤いづみ氏。もう一人は批評家で、わがAKIHIKOゼミ主宰の米沢慧氏。お二人は、山梨日日新聞に、生命・医療に関する「ファックス書簡」を連載中です。米沢氏が内藤氏の話を引き出



【毎日グラフ別冊】1967年4月1日号より

す形で、へいのちを取り囲む状況について、とりわけ脳死による心臓移植の道を開いた臓器移植法の施行、高齢社会、介護社会についてふれて、死も「いのち」とルビをふる時代に入ったと淡々と語りました。

続いて登壇した内藤いづみ氏は、自らが取り組むホスピス医療における事例をスライドを使って紹介、実践を通しての説得力のあるお話は、笑いあり涙あり。「がん告知」や緩和ケアのことなど、時間をオーバーするほどの質問があり、関心の高さが伺われました。

今回も遠くは北海道函館から昭彦氏の長女の佐藤純子さん、博多の大住敏子さんも駆けつけ、折りから『シャッター以前』第三号の発刊を祝して、第二部懇親会は大いに楽しい会になりました。参加者五十七名。

『シャッター以前』第三号は、昨年の第13回AKIHIKOの会の二次会で、中川道夫氏を編集長として刊行されることが決まり、実際に動き出したのは昨年秋でしたが、二十七名もの方々にご執筆ねがい、この春、漸く完成しました。今回は表紙デザインを加清明子さんにお手伝いいただき、また川島書店さんには取次店の窓口になってくださり感謝です。『シャッター以前』三号は、まだ残部があります。この本の売り上げが会の財政を支えています。ぜひ友人知人にお勧めください。

ベトナム戦争からホスピスへ

福岡と東京・葛飾で岡村昭彦写真展開催



ポスターになった写真（ピアフラ

去る四月二十日、二十五日、福

岡市中央区六本松NHKギャラリーにて、「いのちを考える写真展」が開かれた。それに先立ち、四月十八日、「いのちを考えるーバイオエシックスのすすめ」と題して早稲田大学教授の木村利人氏が講演。講演会の入場者は一八〇名、写真展の入場者は二三〇名だった。

今回の写真展の主催は、バイオエシックス研究会（代表二ノ坂保喜氏）と福岡・生と死を考える会（代表隈崎行輝氏）で、AKIHIOKOの会の大住敏子氏が、一時的な移住先である福岡の地で、偶然このお二人と出会ったことが縁となり、講演会、写真展の運びとなったのである。詳しい経緯については『シャッター以前』第三号をお読みください。

一方、四月二十九日、五月四日

まで、東京都葛飾区かつしかシンフォニービルズにおいて「岡村昭彦写真展―21世紀への遺言」が開催されました。入場者は九九二名。

今回は開催二日目の朝、主催者の白石忠男氏のこと、NHKテレビとラジオのニュースで取り上げられたため、新聞などメディアによって写真展を知った人の参加が目立った。

*

東京・葛飾の写真展では、写真に見入る若い人が印象的だった。アンケートに回答した五二九名の中から感想の一部を紹介します。

- 1) 岡村さんの作品を生で見るのは、今日が初めだった。体が熱くなった。(女・29)
- 2) 苦悶と無表情な生きる者と苦痛の消えた死者の顔が、身をおいたことはないけれど戦争の記憶として残ります。(女・30)
- 3) 継続して下さい。(男・57)
- 4) 現在のユーゴへのNATOの爆撃を悲しい目で改めて思い出します。いつも二度と戦争のないことを願っている人々が支配者のせいで犠牲になるのはたえられません。各地で開いて平和を訴えて下さい。(女・40)
- 5) 戦争の本当の姿を表わしていて、胸がいたくなる。(男・44)
- 6) 民族間の紛争や戦争に至る歴史的、政治的事情は様々で、安易な反戦主張は禁物ではあろう。しかしこれだけははっきり考え

られる。「争いになれば犠牲になるのは弱い立場の人達、彼らは死ぬ理由も無く安易に殺される。(中略)

今、こうして生きていられる私も生きられる喜びを感謝しつつ、自分の見えないところで、私同様生きるべき人達が虫けらのように殺されて(現にユーゴなどで)いつている事は心にとどめておかなければならないと思う。岡村氏の取材活動はこうした現実を全世界に知らしめたという意味で素晴らしいジャーナリストであり、その生涯は壮絶を極めたものであったでしょう。

(男・37)

7) 1965年(S40)6月、岡村昭彦のベトナム戦争従軍の写真展をパナ通信より借りてやったことがある。彼の写真展は一堂に展示したものについてはそれ以来はじめて見る。当然新しい多くの写真を見ることになったが、古くからの友人として感懐にひたっている。「シャッター以前」が3号出て、彼の偉大さがますますあらわれてくるように、昭彦の会の活動が今後もいつそう長く持続され、多くの人達に影響し続けることを期待したい。新ガイドライン法案により日本が平和国家より、戦争する国に転換する時にあたり、いつそう切実感が増しているように思われる。(男・67)

8) なんだか、人間が死んでゆく、あるいは

死んでしまっている人のアップの写真が多くて、見ていて悲しい気持ちになりました。

人間の死を美化するつもりはありませんが、もっと人間の生とか死を自然の風景の一部として撮ってほしかった気がします。それと人間同士の戦いはおろかなものだと改めて思いました。(女・44)

9) 初めて見て、色々とびっくりしました。

(女・58)

10) まだ私より小さい子なのに病気や食事ができなくて死んでしまつてとつてもかわいそうでした。募金箱などがあつたら1円や10円でも募金してあげたいと思います。

(女・10)

11) 人の命のもろさ、生きていることへの感謝を感じました。自分の力では何もできないけれど、何かが出来たらと思います。いつになつても平和という日はこないのではありませんか？(女・41)

12) 一度と再び日本を戦争からまもらなければ、日本兵士も海外で同じ事をやって来た、反省。(男・61)

(男・59)

13) 国家、民族、宗教、思想 ⇄ 人間。

(男・43)

14) 悲しみより、怒り！ 平和な日本、

Why。(男・43)

15) 最近意識して美しい物、いごちの良い物しか見ないようにしてまいりました。初

めて岡村昭彦の写真展を見、胸が詰まる思いがしました。悲惨な現実も見つめていかなくてはいけないのですね。(女・48)

16) 「戦争」という重い響きに落胆することなく、岡村さんはその中に飛び込んで「愛」を見つけようとする。そんな人物がこの世界に多数存在していることこそが、「生命の尊厳」につながる第一歩になる。若い、何も持たない私でさえ心の震えを抑えることはできない。私も「その第一歩」に加わるだろうか。(男・19)

17) 一枚の写真を2時間でも3時間でも見ていられそうな程、それぞれの写真には引き込まれた。特に、ヴェトナム戦争の写真はいままでに二、三枚くらいしか見たことがなく、衝撃のあるものだった。(女・19)
(初日4月29日入場者の中より17名のみ紹介)

*

『岡村昭彦報道写真集』(講談社刊)の編者でもある米沢慧氏は、今回のAKIHIKOの写真にふれて「岡村昭彦の写真の力が変わった!と思う。『ベトナム戦争写真』『戦争報道写真』から、ほかならぬ『写真』になっている。要するに、歴史から解放された写真、生命存在としての写真におさまっている。今回の写真展ポスターにそれは象徴される」と語っている。ご自分の住むところで写真展を希望される方は事務局へご連絡ください。

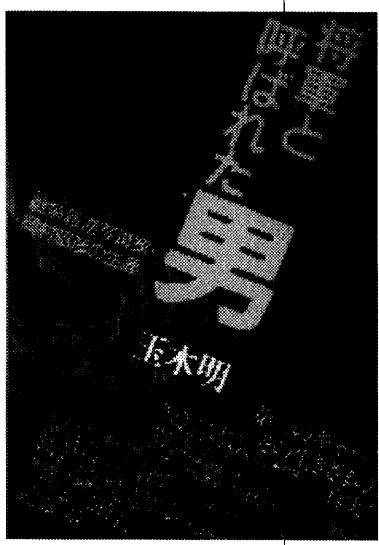
▼特別展

- 1 「AKIHIKOの会」の活動の一つとして、毎月一回「AKIHIKOゼミ」(主宰米沢慧)を開催しています。原則として毎月第二土曜日、一三時より、JR水道橋駅・倫理研究所八階会議室にて。基調講演のあと質疑・自由懇談、そのあとビールで乾杯。年会費は三〇〇〇円です。お気軽にご参加ください。
- 2 このゼミの一環で「夏期特別セミナー」を、今年も八月七〜九日にかけて開催します。本年は三日間とも軽井沢町千ヶ滝の岩城邸を会場に開催します。

▼今回のゲスト講師は、東京都写真美術館専門調査員で写真史家の金子隆一氏。演題は一九三〇年代の貴重なグラフィ誌紙資料をつかって「メディアの中の写真―近代フォトジャーナリズムの成立」。金子さんは幕末から現代までの日本の写真史の調査、研究の第一人者。東京都写真美術館の開館に尽力し、一方写真集のコレクターとしても知られます

さらにもうひとり。千葉地裁判事の横山巖氏による『少年審判と少年の更生』。そのほか米沢慧氏による『軽井沢―堀辰雄と病(結核)地勢論』、飛び込みで玉木明氏等々、夏期セミナーならではの企画を準備中です。

▼参加希望者は、事務局までご連絡ください。締め切りは七月二五日。



- 3 「将軍」と呼ばれた男 (玉木明著・洋泉社刊 税別千八百円) 戦後史の逆説を生きたジャーナリストとしてのAKIHIKO。必見の書
- 4 「シャッター以前」第3号購入のお願い 三月の「AKIHIKOの会」に合わせて発売された「シャッター以前」第3号が残っています。これが売れないと第4号の出版はできませんので、販売方よろしく願います。
- 5 「いのちに寄りそって」(内藤いづみ/米沢慧共著・オフィス・エム刊・税込千六百円) ホスピス医と批評家との、40通の(いのち)の往復書簡

【往復書簡】

内藤いづみ

米沢慧

いのちに寄りそって

編集 金子隆一氏 監修 米沢慧氏

人生の本題に於て、病のしほりも深さを求めた人々が集った瞬間、いのちの在りよるに、病に臨む人々の心と魂の交わりが、多くの人に感動が寄せられることである。

6 「ベトナム もうひとつの旅」(宮島安世著・明石書店刊・税別二千五百円) ベトナムに愛着を抱き続けて30年。執念の一作。



7 「AKIHIKOの会」の活動は、年一回の「AKIHIKOの会」と不定期の会報発行、毎月一回の「AKIHIKOゼミ」などです。会費、会則、会長なしで、通信費一〇〇〇円(不定期)を払った人を会員として登録して、「AKIHIKOの会」などのお知らせや会報をお送りしています。この二年間ほど通信費を払っていない人で、引き続き案内等の必要な方は通信費(切手可)をお送りください。

▼通信費の送金先は左記の通りです
口座番号「〇〇一七〇一六一五一二三」
加入者名「岡村昭彦の会」

「岡村昭彦の会」会報第九号
発行 東京都江戸川区西小岩五―十一―二七
戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局
TEL&FAX 〇三―三六五七―八三八〇